

# 分かれ道

森 もり  
幸 ゆき  
夫 お

私は、山口県萩市の北にある山椿の名所、笠山に行った。

福岡市天神から、妻と二人で観光バスに揺られて二時間ほどで着いた。三月の始めだから、椿の花の盛りは過ぎていたが、日曜日のせいか見物人は多かった。

定年退職して五年になる私は、海外も毎年は行けず、気楽に行ける日帰りのバス・ハイクを思い立ったのだ。

笠山といっても山らしい山は無く、うっそうと繁った椿の林が日本海に突き出た半島に広がっているだけだ。観光客は椿の林の入り口から次々に吸い込まれていく。

私も、景色のいい海岸を背に林の中に入ると、もう別世界だった。背の高い山椿の木が密生し、締まった木肌の幹が真っ直ぐ上に伸びている。黒い緑の葉が繁った枝先は、逆に下向きになって垂れていた。深紅の花は盛りを過ぎていたが、まだ結構残っている。

二人並んで通れるくらいの通路は、暗いところが多く、先日の雨のせいかとところどころ湿っている。樹上をヒヨドリが甲高い声で鳴きながら飛び交っていた。

妻から遅れて歩きながら写真を撮っていた私は、団体グループに道を阻まれても、別の道へ回るとすぐ元の道と合流して彼女を見失うことはなかった。狭い道は、ところどころ分かれ道になっていても先で合流していた。

暗く繁った葉の中から小さな赤い花が覗いている様は、水彩画より油絵の方が似合うと思いつつシャッターを切った。

やがて私は、似たような景色を写すのを止めて、カメラをぶら下げたまま前方の妻を探したが見あたらなかった。いずれ追いつくだろうとゆっくり歩いていると、また、分かれ道に出た。今までは、ほとんど右側に進んでいた。海の方へ出やすいように大きな円を描いて入り口の方角へ戻るコースをイメージしていたからである。

今度も右に折れて、あまり陽の射さない湿った道を進んでいると、樁のトンネルの下で三人の女性に出会った。枝振りのいい見事な大木が濃い緑の葉を広げ、顔を出した赤い樁の花が女性たちを魅了していた。うつとりと見上げている彼女らの間を、私はすみません、と右の手刀で道を作るしぐさをしながら通過した。

かすかに香水が匂った。自然の中でもその匂いは上品で違和感がなかった。

私が彼女らの間を通り抜けたとき、一人が声をかけてきた。

「あのう、林さんじゃありませんか？」

思わず振り向いたが、私の見知らぬ若い女性ばかりだ。

「やはり、林さんだ。私、私です。ジュンコです」

こんなところでいきなり私、ジュンコです、と呼びかけられても心当たりは無い。彼女たちは、二十歳代後半のように見えた。三人共、落ち着いた品の良い女性だ。特に声をかけてきた女性は脚がすらりと伸び、私好みのスタイルをしていた。若い頃のように、ざらざらした色気こそ失せていた私だったが、無くなってしまった訳ではない。むしろ、選択眼だけは冴えていた。

「どちらのジュンコさんでしょうか？」

「ほら、こんなに小さかった頃、お宅を訪ねたジュンコです」

彼女が胸の高さに掌を置いたとき、私は思い出した。彼女の目にも見覚えがあった。

二十年ほど前の午後だった。我が家の玄関のチャイムで外に出ると、小学五年生になる娘と同じくらいの女の子が立っていた。

日曜日なので妻と娘がテレビを見ていたが、いつものセールスやキリスト教の勧誘だろうと思っただけで、無視している。私は妻に内緒で、自分だけの商品を注文していたので、その宅配便が着いたのではないかと素早く外に出たときだった。

順子と名のつた彼女は、いきなり私に結婚してくれと言った。妻子は家の中に居るので彼女の声は聞こえない。

その子の母親は、私が良く飲みに行く東中州の店のホステスだった。

ある夜、かなり酔っていた私は、彼女を郊外の炭住街の跡のような戸建ての古い家までタクシーで送ったことがある。お茶に誘われて家にも上がり込んだ。特別好きな女でもなかったが、夫は亡くなっていて寂しいと言うので請われるまま彼女を抱いた。

その家の手洗いから出てくると、隣の部屋にいた十歳くらいの女の子が私を手招きした。そして、母を好きかという。嫌いではない、と答えると、あたしは好きか、と聞いた。

ませた子だと思って良く見ると、目鼻立ちも整っている。わずかだが、色気さえ備わっていた。

お前のような女なら結婚してもいい、大人になるまで待てないかもしれないと言った。私には妻子もあるから、冗談のつもりである。

ところが、数日後、どうして調べたのか知らないが、その子が私の家を訪ねてきたのだ。おそらく、ホステスに渡した私の名刺にある勤め先で住所を聞いたのかも知れない。

その子は、約束どおりに私と結婚してくれ、大人になるまで待てないと言うのだ。いくら好奇心の強い私でも、娘と同じ女の子などに興味はない。ばか言うなと答えたが、今結婚してくれと言う。親のホステスにそそのかされているのではないのかと思ったが、どうもそうではないようだ。頭もおかしい風ではない。むしろ賢そうな顔をしている。

私は、もう歳だし妻子もいると言っても、歳は関係ない、妻とは別れてくれと言うのだ。

彼女は、あくまでも大人の女のつもりでいる。

彼女を観察してみると、確かに魅力的な女性になる素質は備わっている。顔形も良く、聡明に見えるし、母親と違って媚びる風もなく、凛とさえしている。勉強すれば聡明さに磨きのかかった素敵な女性になれると思った。

私は彼女に言った。人間は体だけで好き合うのではない、いつも個室に閉じこもって一生を送るわけではない。教養も情操も要るし、世間との交流もあり、経済力も要る。それらを身に着け、大人になってから若い男性を見つけて結婚しなさいと。

それでも、私と結婚したいと言い張る。

とにかく、その歳で結婚なんて早過ぎる、帰ってしっかり勉強しろ！ と叱りつけた。

彼女は、私を睨んで、きつと待っているからね、と言い残して帰った。

その後、私は仕事も多忙だったし、我が子の進学や結婚などにも追われ、そんなことは忘れて、気がつくまで定年を迎えていた。

まさか、あの子の女の子にこんな所で再会しようとは、思ってもみなかった。

彼女は、意外な組み合わせに戸惑っていた二人の連れに、私はこの人と話があるので先に行行ってね、と微笑んだ。

私は、予想した以上の素敵な女性に成長した彼女を見て、目尻が垂れた。彼女は私好みに眺めたような容姿をしていた。豊かで長い髪。きめの細やかな肌、長い首、長い睫毛で、きりりとした目。体つきも、なで肩で細いウエスト、丸いヒップ、締まった足首。

照れて彼女を見ている私をからかうように、カラスが一声鳴いた。

彼女は、歩きながら話しましょう、と私の左腕を握った。

「なつかしいわー」

「ほんと、久し振りだねー」

私は、ふくよかで、しかも凜とした不思議な魅力の彼女を横にして上気した。

「ずいぶん待ったわー。ほんととはあのとき結婚したかったのに……」

彼女は、いつの間にか私と腕組みをしていた。

私は、彼女に腕を組まれて少し困った。妻に見られても後ろめたいことはないし、とやかく言う妻ではない。だが女同士のことは、男の私には分からない葛藤があるかもしれないからだ。

むげに彼女の腕を引き離すのも悪いし、もつたいたい気もする。妻に見せたい気もするが、あまり浮き立った私を見ると妻もいい気はしないだろう。

「今の、僕でもいいの？」

私の問いに、彼女は躊躇せず答えた。

「もちろんですとも。貴方は私を好きですか？」

「そりゃー、好きさ。君くらい素敵な人なら誰だって好きになると思うよ」

「ほんと？ うれしいわ」

私の言葉に嘘はなかった。彼女は容姿だけでなく、洗練された物腰で言葉遣いにもがさつさや棘がない。ホステスの母親一人でこれまで育て上げるのは難しいはずだと思ったので、それとなく探りを入れた。

「その後どうしていたの？」

「貴方の家から自宅に戻って考えたの。人に好かれるには、貴方の言うようにしっかり勉強して、素敵な女性に変身してからお会いしようと思ったの」

「君は賢いね。僕はあまり勉強しなかったの後悔ばかりしていたから君に忠告したのだ」

「私、母のようにならなくなかったの、がむしろに勉強したわ」

「君のお母さんも事情があつて水商売を選んだのだから、卑下してはいけないよ。僕はむしろ、女の人は一度くらいホステスのような仕事を経験した方が世の中や、男の本性も分かつて人生の勉強になると思ってる」

「口で言うのは易いのよ」

「僕は、娘に高校の夏休みに一度体験させた。もっとも、喫茶店のウェイトレスだったけ

ど。それでも娘は大変勉強になったと言っていたよ」

「最近、私もそう思えるようになったけど、昔は、なぜ私の母がホステスなの、と恨んだわ。人にも話せなかったし……」

「でも、こんな立派な女性になったじゃないか。お母さんのお陰だろう？」

「母は反面教師だったわ。酔っ払って、男の人を家に連れ込むし……」

「では、誰のお陰？」

「私自身で切り開いたつもりよ」

「でも学資などは、親に出して貰っていたのだろう？」

彼女は少し顔を曇らせたが、すぐ快活な笑顔に戻ると私の腕を強く抱いた。

「私、悪いこともしたのよ」

「悪いことって、どんな？」

「誰にも話してないけど。私ねー、ゆすりをやったの」

「あの、強請りタカリの？」

「そう、母の相手の男の家に乗り込んで、奥さんからお金をせしめたのよ」

「驚いたねー。ほんとにやったの？」

「貴方に嘘なんかつかないわ」

「でも、ホステスと客のことで強請りなんてできないんじゃない？」

「私の場合は、事情が違ったの」

彼女は、母親の連れ込んだ男に犯されたことを打ち明けた。

中学二年生のときだと言う。気丈な彼女は、相手に鉄で抵抗したが叶わず、力づくで犯されたと唇を噛んだ。

母に話すと、なるだけ穏便にと言うだけだった。怒った彼女が母に住所を聞き出して翌朝、その男の家に乗り込んだ。本人は出勤して不在だったが、奥さんに直談判をしたと言うのだ。奥さんからも、夫や子ども将来のため穏便にお願いします、と泣いて頼まれた。

彼女は、散々悪態をついたあと、その家が資産家らしかったので、たんまりお金をせしめたというのだ。

どうせ元の体には戻らないし、心もホステスの子だということではいじめていたので、お金だけが味方のような気がしたという。だが、良く考えて、そのお金を基にして素敵な女性に変身し、立ち直ってみようと決めたというのだ。

私は、自棄にならずに前向きに生きた彼女を素晴らしいと思った。

その後、彼女は猛勉強して難関高校に進学し、そこを上位で卒業すると、京都の名門大学の医学部に進学したのだ。奨学金を受けて無事卒業したという。

あの、ませた子が脳外科医になつて五年になるという。春休みに医師仲間と椿の名所に見物に来たというのだ。

「小学生のとき僕と結婚したいと思つたのは、なぜ？」

「なぜと聞かれても、私もよく分からないの。母に対抗するためだったのか、貴方が歳を取る前に愛されたかったのか……」

「お父さんと結婚したいという、幼い娘の心理状態と同じだったのかも知れないよ」

「私は、幼いとき父を亡くしているので、貴方を父と思いたかつたのかも……」

それでも、こんな素敵で彼女が今も私を好きと言うのが信じられなかった。

「それにしても、どうしてこんな中年に興味があるのかね」

彼女は私の腕から手を抜くと、目をいたずらっぽく見開いて私の背中をポンと叩いた。

「中年だなんて……。もう初老じゃないの？」

彼女のお世辞のない辛らつな言葉が、かえって私を救った。彼女は、話し続ける。

「でも、男女の仲は歳も容姿も関係ないのよ。人間一皮向いたら皆同じなの。それより、目に見えない心や志などの方が大切だと思うの。何を好み、何に感動するか、人の気付かないことにも気付く繊細さ、それに前向きで行動的で遅い人が、私は好きなの」

「僕は失格だな」

彼女は黙って頭を振った。

彼女の言うとおり、男女の間なんてそんなものかも知れないと思うと、なぜか私の心が華やいできた。

再び腕を組んで歩いているうち、分かれ道に来た。

これまでどおり右に行こうとする私の腕を、彼女は左の方へ引いた。左に行きたいと言うのだ。私は右にこだわった。大した理由はないのだが、左に行けば道に迷いそうな気がした。それに、なにか得体のしれない出来事に出会いそうな予感がした。

元々、暗いところや深い海の中を恐れていた私の直感である。これまで、自分の直感を大切にしてきた私だったから、いくら素敵で女性のためとはいえ、たやすく変えるわけにはいかないのだ。それに長年連れ添った妻も待っている。

「左に行きましょうよ」

彼女の少し鼻にかかったような声と香水の匂いに、私の心が少し揺れた。

それでも私は右にこだわった。論理的には説明できないが、左に行くと恐ろしいことが待っているような気がしてならなかった。

同時に、左に行きたい気持ちもあった。いつまでも同じ生き方をしている方がいいのか、という想いもあった。私は体力も気力もまだ充分残っている。残りの人生をこのまま惰性で生きていて悔いはないのか、もっと、冒険してもいいのではないのか、畳の上で死ぬのが最上なのか、例え、野たれ死にしたとしても充実した生き方をした結果ならそれでいいのではないのか、という考えも顔を出してきたのだ。

それでも、苦勞をかけた妻を放り出すような生き方はできない。何かを取れば何かを捨てなければならぬのに、欲しがるばかりで捨てられない私は、なにもかも抱え込んで、結局、身勝手なくせに優柔不断な男になっていた。この辺でけじめをつけないと、中途半端な余生を送ることになる。

私はこの分かれ道の右が、老後の妻子との平穏な生活。左は若い女性との波乱に満ちた甘い生活。右が死後の極楽、左は地獄のように思えた。例外もあるが、その外的考えではないという確信もあった。

私は、左の道を選んだ。

彼女に引かれるように進んでいるうちに、妙なことに気付いた。彼女が少しずつ若返って行くのだ。

『山頂まで一キロ』の標識を過ぎると彼女は二十歳くらいになっていた。服装は変わらぬのに、さつきより肌はきめ細かに艶を増し、髪も一層潤いが出てきた。少し暗いせいだろうかと思いつながら、敷き詰められた落ち葉を踏み、茂みを抜けて明るいうちに出て見直したが、彼女は確実に若返っていた。それでも私は黙って歩いた。単なる勘違いか、一時の気の迷いかも知れないと思ったからである。

やがてムクの大木の下に来ると、彼女はいつの間にかセーラー服を着た高校生に変わっていた。身長はほとんど変わらないが、髪形は短くシンプルになり、体形は少し痩せていた。足は白いソックスにスニーカーだった。濃紺の制服にマークは無かった。

日ごろはあまり物事に動じない私も、大いに戸惑い、立ち止まって尋ねた。

「いったいどうしたの？ そんなに若返って」

「昔の方へ進んでいるのよ。私たち……」

「私たちって、僕もかい？」

「そうよ」

私は自分の腕を見た。太くなっている。背筋も真っ直ぐ伸びている。顔は見えないが張りが出てきた感じがする。彼女は、私が四十代の男盛りに戻っていると言ってはしゃいだ。

「若くなるのはうれしいけど、いつたどこへ行くの？」

「もうすぐ着くわ」

大ムクの木を後に、高さ二メートルほどの石垣の間を十数歩過ぎると、もう樺の群生林も雑木林に変わろうとしていた。

笠山は、萩城の鬼門（北東）の方角にあたるので、毛利藩は立ち入り禁止にし、数百年間自然林だったのだ。明治になって禁止が解かれ、多くの大木は切り倒され、用材や薪炭用にされた。切られる度に切り株から新しい芽が伸び、雑木の中に樺の赤い花が見られていたという。昭和四十五年に著名な樺の研究者が笠山を訪れ、雑木やつる草を切り除けば立派な樺林になると、当時の市長に助言したという。それを実行した今は、十ヘクタールの中に二万五千本のやぶ樺の群生林として観光名所になった。平成十四年には、萩市から天然記念物に指定されたのだ。だから、樺の群生林も人の手入れの及ばない奥の方は、ミカン畑や雑木林やつた草で覆われていた。

その雑木林と樺の群生林の境目に樺のトンネルがあった。高さと幅は三メートル足らずだが、中は咲いた樺の花が灯りとなり、散った花が赤いじゅうたんとなって三十メートルほど続いていた。赤い殿堂のようだ。

「やっと着いたわ」

セーラー服の彼女は、赤い花の殿堂に入ると四十代に若返った私の腕を解いた。

「どうということなの？」

「ここで貴方と結婚したいの」

「でも結婚するなら、大人の君の方がいいな」

「高校生は、もう一人前の女よ」

「せめて二十歳以上の君と一緒にになりたいよ。そこまで戻ろうよ」

「戻れないわ。私は、ここでの結婚を長い間待ち続けていたの」

「なぜ、戻れないの？」

彼女はそれには答えず。愚痴めいたことを言い出した。

「貴方も最初に分かれ道で決心したはずよ。もう戻れないだろうと分かっていたはずよ」

何かが起こるといふ私の予感も当たっていた。彼女と一緒になることを選んだのも自分だ。ただ、高校生になるなんて予想さえできなかった。



「まだ、君は未成年だし……」

「さつきはあれほど素敵と言っていたのに、高校生には魅力を感じないの？」

「君の素晴らしさに変わりはないけど、法的には問題だよ」

「法なんて関係ないの。貴方は容姿だけではもの足りず、女医という肩書きがないと好きになれないのよね？」

それには答えたくない私に、彼女は大人びた表情で初めて悲しそうな顔をした。

「どうして戻れないの？」

私の問いにしばらく黙っていた彼女は、総てを吹っ切るように元気な声で答えた。

「貴方だけなら戻れるわ。でも、私は結婚しないと笠山から出られないの」

「どんな理由？」

「仕方ないわ。本当のことを話すわね。私は中学二年のとき襲われたと言ったでしょう？  
実はその後も、その男が現われたの。初めの方は嫌で仕方が無かったけど、悲しいことに段々、その男の言いなりになるようになっていったの。強請りをした後ろめたさもあつたのでしょね。そして、高校二年のとき、本気で勉強しようと家を出ることにしたの。医者になりたかったの。しかし、家を出る前日にその男にばれて、もめた末に殺されたの」  
彼女は、驚く私にこれまでの嘘を詫びた後、無念そうな口調で語った。

その男に殺されると車のトランクに入れられてこの笠山の樁のトンネルを出たところにある藪の中に捨てられたと言うのだ。

笠山はわずかだが野菜畑やミカン畑がある。私は、農家の人が軽トラックを乗り入れていたのを思い出した。

彼女の母親は、娘が家を出したと思つて警察に届けた。彼女の遺体は、まもなく笠山の農家の人に発見され、ホステスをしていた母の客の犯行だと分かり、犯人も逮捕された。

私は彼女の気持ちに疑問を持った。死んだ原因は同情できるが、結婚相手が私でなければならぬ必然性はない。私を昔から好きだったと言っても、私は犯された後もその男と情交を重ねるような女性は嫌いだ。それでも、美人で肩書きもいい女性に飛びつく私の弱点を突かれた私にも非はある。

それに高校生とはいえ、淑女になった彼女を目前にして私の気持ちは揺れた。

「今、君と結婚したら僕はどうなるの？」

「私とあの世で、今の年齢のまま暮らせるわ」

「死ぬのかー。では、断るとどうなるの？」

「貴方は歳をとり、私はこの笠山でさ迷い続けるの」

「君が成仏できる方法はないの？」

「お経もあげて貰ったけど、あまり効果がなかったわ」

「あまりと言うことは、少しは効果があったのだね？」

「そうよ。きつと母がお坊さんに払うのをケチったのでしょね」

「分かった。お母さんには僕からも充分お布施を弾むように言つてやるよ」

私は順子への未練を断ち切ることにした。お布施なども出してやろうと思った。

「僕は妻のところへ戻るよ。君が成仏できるように君のお墓にもお参りするよ」

「嫌、帰さない。お経やお布施なんか要らない。私と結婚して！」

「やはり、別れたほうがいいよ。僕は妻子もあるし……」

「私は、この機会を何年も待つていたのよ。こんな寂しいところで……」

「君の無念も分かるけど、他人に迷惑をかけてはいけないよ」

「子どもときも追い返され、きれいになつても追い返す貴方つて薄情な人ね」

「薄情じゃないよ。今でも君は好きだよ。でも君が成仏できれば、僕の心に良い思い出として残るけど、いつまでもさ迷い続けていると気味悪がられたうえ、お互い嫌な思いをするだけだよ」

賢い彼女だから、もう無理は言わなくなった。寂しそうに俯いて落ち葉を足先で掘っている。私は、いじらしくなって抱きしめたいのを我慢した。ここで情に流されると収拾がつかなくなるのは目に見えている。

私が麓を目指して歩き出すと、彼女は私の左腕に自分の右手を組んできた。送ると言うのだ。

さつきとは逆に彼女は、大ムクの木ところでセーラー服から二十歳の女性に戻り、『山頂まで一キロ』の標識のある、岬絞りや笠山侘助の咲く林の前に来ると、三十歳前のまぶしい女性の姿に戻っていた。私も、段々歳を重ねて初老の姿に戻っていた。

笠山の標高は百十二メートルしかない。しかも東洋一小さい火山だ。直径と深さが共に三十メートルの火口がある。二人は中腹から引き返したので山という実感が無い。丘を散歩しているようなものだ。

やがて出入り口の広場が近づいてくると、彼女は私を返したくないと言い出した。私も別れたくない気持ちが募ってきたが我慢した。しかし、彼女はため息をつきながら、『椿開花基準木』の表札の前で私を引き止めると、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「諦めよう……」

その後、快活な声で私に説明を شدした。

「この表札は、椿の花の開花の基準になる木を指定してあるの。この椿を含め七本が指定されていて、基準木の総てが花をつけたとき、笠山の椿は見ごろを迎えるの」

「十二月から三月が見ごろだが、二月中旬から三月中旬の『萩・椿まつり』のころが一番賑わうのだからね」

「だから、そのころきつと来ると約束して！」

「うん、来るよ」

「約束よ。嘘つくと化けて出るわよ」

彼女は、美しく見開いた妖しい目で彼を睨んだ。

「そんなきれいなお化けなら、大歓迎だよ。毎月来たいくらいだよ」

私は身震いしながら大げさに言った。

「嘘つき！ 今も逃げ帰っているくせに……」

「ほんとだよ。必ず来るよ」

そのとき、出入り口の広場の方から私を見つけた妻が、手を振って私を呼んだ。

「今行くー」

そう叫んだ後、順子に別れを告げようと振り向くと、もう彼女の姿は消えていた。

私の左腕がチクリと痛んだ。腕をあげて見ると、折られた萩小町の椿の花が一輪差しのようにベルトの下に挟まれていた。